

陸連時報 三

2020
令和2年

9 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

第24回世界ハーフマラソン選手権 日本代表選手	182
陸上競技研究紀要の活用について(森丘 保典<日本大学>、松林 武生<国立スポーツ科学センター>、三浦 康二<日本スポーツ振興センター>)	184
リモートでランキングを決定! 「2020 全国高等学校リモート陸上競技選手権大会」/ 「第66回全日本中学生通信陸上競技大会」	188
セイコーゴールドングランプリ陸上2020東京 ～国内トップアスリート、そして高校生が国立競技場に集結!～	190
大会観戦ガイド	191
陸協NEWS	192
事務局からのお知らせ	193

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

第24回世界ハーフマラソン選手権 日本代表選手

2020年10月17日（土）グデーニャ（ポーランド）で開催される

「第24回世界ハーフマラソン選手権」に派遣する日本代表選手を紹介いたします。

※「第24回世界ハーフマラソン選手権」は、2020年3月29日（日）に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、開催日程が変更となっています。

※海外への派遣については、外務省の入国制限措置などの情報を注視し判断いたします。

大会ページ

▼<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1528/>



【女子5名】



前田 穂南

(マエダ・ホナミ)

写真：アフロスポーツ

所属：天満屋
生年月日：1996/7/17
登録陸協：岡山
自己記録：1.09.08



三宅 紗蘭

(ミヤケ・サラ)

写真：フォート・キシモト

所属：天満屋
生年月日：1999/7/26
登録陸協：岡山
自己記録：1.09.23



竹山 楓菜

(タケヤマ・カエナ)

写真：フォート・キシモト

所属：ダイハツ
生年月日：1995/10/30
登録陸協：大阪
自己記録：1.09.12



安藤 友香

(アンドウ・ユカ)

写真：アフロスポーツ

所属：ワコール
生年月日：1994/3/16
登録陸協：京都
自己記録：1.09.38



萩原 歩美
(ハギワラ・アユミ)
写真：アフロススポーツ

所 属：豊田自動織機
生年月日：1992/6/1
登録陸協：愛知
自己記録：1.10.16

【男子5名】



藤本 拓
(フジモト・タク)
写真：アフロススポーツ

所 属：トヨタ自動車
生年月日：1989/9/11
登録陸協：愛知
自己記録：1.00.06



古賀 淳紫
(コガ・キヨシ)
写真：アフロススポーツ

所 属：安川電機
生年月日：1996/4/30
登録陸協：福岡
自己記録：1.00.49



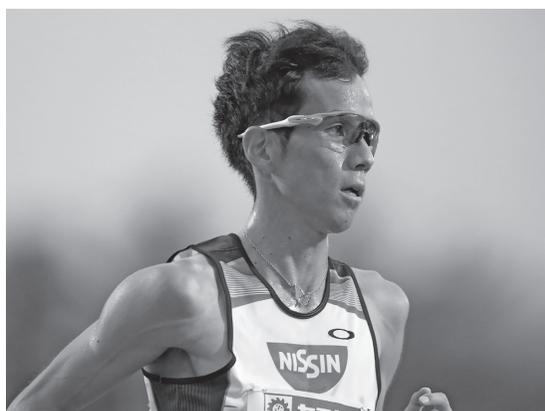
中村 高洋
(ナカムラ・タカヒロ)
写真：陸上競技マガジン

所 属：京セラ鹿児島
生年月日：1983/8/24
登録陸協：鹿児島
自己記録：1.00.57



延藤 潤
(ノブトウ・ジュン)
写真：アフロススポーツ

所 属：マツダ
生年月日：1991/12/24
登録陸協：広島
自己記録：1.00.56



佐藤 悠基
(サトウ・ユウキ)
写真：アフロススポーツ

所 属：日清食品グループ
生年月日：1986/11/26
登録陸協：東京
自己記録：1.01.06

陸上競技研究紀要の活用について

森丘 保典（日本大学）、松林 武生（国立スポーツ科学センター）、三浦 康二（日本スポーツ振興センター）

【世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析について】 森丘 保典（日本大学）

「根拠に基づく医療（Evidence-based Medicine）」の本来的な意味は、研究によって得られた「最良の根拠（エビデンス）」と「臨床家の経験」および「患者の価値観」などを統合し、よりよいケアに向けた“意志決定”を行うことにあります。上記の「臨床家」を「コーチ」、「患者」を「競技者」、「ケア」を「トレーニング」に置き換えれば、競技スポーツへの示唆として読み替えることが可能です。すなわち陸上競技における「根拠に基づくトレーニング（コーチング）」とは、様々な研究によって得られた「エビデンス」と「指導者（コーチ）の経験」や「競技者の価値観（目的・目標）」などを統合した意志決定の最適化であるといえますが、それは研究者、指導者（スポーツドクターやアスレティックトレーナーなど種々のサポートスタッフを含む）、そして競技者の「協働（同じ目的のために力をあわせて働くこと）」によってはじめて可能になります。

その協働の場のひとつが「陸上競技研究紀要」です。この紀要には、研究論文や時宜を得た特集企画はもとより、指導者による実践報告（指導法および指導記録の報告）、科学委員会研究報告や医事委員会のメディカルレポートなど、多様な切り口による「エビデンス」が満載されており、研究者や指導者による意志決定の最適化を図る「場」となることが期待されます。読者の方々には、掲載されたエビデンスについての新たな気づきやご批評をお寄せいただくことはもとより、ご自身の実践についても積極的に発信していただきたいと思えます。

2017年に発行した「JAAF VISION 2017」においては、「国際競技力の向上」というミッションについて「2028年までに世界のトップ8、2040年までに世界のトップ3を目指した競技者の育成・強化を推進する」という具体的な数値目標が立てられています。このような目標が達成されたか否かの評価については、世界大会でのメダル獲得や入賞数（順位）を得点化し、その合計点を競う「プレイングテーブル」と呼ばれる量的な評価によって行うことが一般的です。昨年の世界選手権ドーハ大会における我が国のメダル獲得数は3、入賞数は5であり、合計33点のプレイングテーブルは11位という結果でした（表1）。この結果は、これまでの世界選手権における最高順位でしたが、8年後の目標とされている「世界トップ8」に近づいたかといえ、10位のウクライナとは10点以上の開きがあり、8位のポーランドや7位のドイツのレベルに至るまでの道のりは大変険しいといわざるを得ません。

測定競技に分類される陸上競技においては、競技パフォーマンスの総合的かつ絶対的な評価指標は「（競技）記録」であるといえます。全ての競技者は、その競技レベルを問わず何らかのかたちで目標記録を設定し、その達成や更新を目指してトレーニングを実践します。そして、そのトレーニング実践の結果として達成される自己ベスト記録は、歴年齢や競技者としての成熟度合いの高まりに呼応するように更新の難易度が上がりますが、さらにオリンピックや世界選手権における更新確率は30%以下であることから、世界中の競技者が目指す最重要試合での「勝負は時の運」という表現はまさに正鵠を

表1 世界選手権ドーハ大会におけるプレイングテーブル上位国

順位	国・地域	金	銀	銅	4位	5位	6位	7位	8位	ポイント
1	アメリカ	14	11	4	7	6	4	9	8	310
2	ケニア	5	2	4	3	3	3	3	2	122
3	ジャマイカ	3	5	4	3	1	3	1	2	115
4	中国	3	3	3	2	4	2	1	2	99
5	エチオピア	2	5	1	3	1	2	0	1	83
6	イギリス	2	3	0	5	2	2	3	0	82
7	ドイツ	2	0	4	3	1	2	1	2	69
8	ポーランド	1	2	3	0	2	1	2	1	56
9	カナダ	0	1	4	0	2	3	2	3	55
10	ウクライナ	0	2	0	2	3	2	1	0	44
11	日本	2	0	1	0	0	2	2	1	33

※数字はメダルおよび各順位の延べ獲得数

※ポイントは金（1位）を8点～8位を1点としたときの積算

得たものであるといえるでしょう。

そこで最新号 (Vol.15) では、「世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析」という特集を企画し、参加者の国・エリア別分布や参加資格記録、ファイナリスト (8位入賞者) の記録 (自己ベスト記録、シーズンベスト記録およびその相対値)、予選 (準決勝) から決勝までの記録の推移などを踏まえ、各種目 (カテゴリー) を専門的に研究している気鋭の研究者に最重要試合に向けた競技会準備や実際の試合行動戦略などに役立つ「エビデンス」の作成を依頼しました。これらのデータは、世界を目指す競技者の目標設定の目安となるだけでなく、その蓄積と分析を継続的に行うことによって、年次トレーニング計画や中長期的な育成・強化戦略の立案および再構築などにも寄与することが期待できます。この特集が、「2028年までに世界のトップ8、2040年までに世界のトップ3」という目標を達成するための、言いかえれば最重要試合での「時の運」を引き寄せるための一助になれば幸いです。

【世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析 — 短距離およびリレー種目における国際競技力の動向 — (高橋と小林、陸上競技研究紀要第15巻4-10ページ) より】 松林 武生 (国立スポーツ科学センター)

日本の男子短距離選手は、近年目覚ましい活躍を見せて

ています。特に男子100m においては、2017年に桐生選手が9.98 秒、2019年にサニブラウン選手が9.97 秒を記録し、2度の日本記録更新が成されました。この他にも、2017年と2018年には山縣選手が10.00 秒、2019年には小池選手が9.98 秒を記録するなど、好記録が多く出されています。また男子4×100mリレーにおいては、2016年リオデジャネイロオリンピックでの銀メダル獲得以降、ロンドン世界選手権、ジャカルタアジア大会、ドーハ世界選手権と、国際大会においてメダルを毎年獲得し続けています。2021年に延期された東京オリンピックにおいても、これらの種目での日本選手の活躍が期待されるどころです。

国際大会において短距離種目のファイナリストは、非常に優れた自己ベスト記録 (PB) もしくはシーズンベスト記録 (SB) を持っています。ただし、予選、準決勝と何度もレースを重ねて決勝に挑む中では、決勝レースにてPBやSBにどれだけ近い記録を出せるかという点も重要です。表2は、2019年のドーハ世界選手権における男子100mの結果を分析したものです。この報告によると、男子100mファイナリストの決勝レースにおけるPB達成率は97.2～100.3% (平均99.1%) でした。一方、同選手たちの準決勝レースにおけるPB達成率は96.0～99.1% (平均98.1%) であり、決勝よりも少し低かったようです。ファイナリストは準決勝においてもまだ力

表2 男子100mファイナリストおよび日本人選手の準決勝および決勝での分析結果

	男子100m準決勝 (通過者8名)					男子100m決勝				
	PB	SB	FT	%PB	%SB	PB	SB	FT	%PB	%SB
最高	9.69	9.81	9.88	99.1	99.9	9.69	9.81	9.76	100.3	100.7
最低	9.99	10.10	10.12	96.0	97.8	9.99	10.10	10.08	97.2	98.8
平均	9.86	9.94	10.05	98.1	98.9	9.86	9.94	9.95	99.1	99.9
サニブラウン	9.97	9.97	10.15	98.2	98.2					
小池	9.98	9.98	10.28	97.1	97.1					
桐生	9.98	10.01	10.16	98.2	98.5					

PB: 自己ベスト記録 (秒)、SB: 2019年シーズンベスト記録 (秒)、FT: フィニッシュタイム (秒)
 %PB: PBに対するFTの達成率 (%)、%SB: SBに対するFTの達成率 (%)

引用表: 陸上競技研究紀要第15巻5ページの表1より抜粋

表3 男子4×100mリレー決勝進出チームおよび日本チームの予選および決勝での分析結果

	男子4x100mR予選 (通過チーム8か国)					男子4x100mR決勝				
	PB	SB	FT	%PB	%SB	PB	SB	FT	%PB	%SB
最高	37.38	37.60	37.56	101.6	102.7	37.38	37.56	37.10	100.8	102.5
最低	38.24	38.65	38.03	98.3	100.0	37.91	38.03	38.07	99.3	99.3
平均	37.77	38.07	37.81	99.9	100.7	37.69	37.81	37.57	100.2	100.6
日本	37.60	37.78	37.78	99.5	100.0	37.60	37.78	37.43	100.5	100.9

PB: チームベスト記録 (秒)、SB: 2019年シーズンベスト記録 (秒)、FT: フィニッシュタイム (秒)
 %PB: PBに対するFTの達成率 (%)、%SB: SBに対するFTの達成率 (%)

引用表: 陸上競技研究紀要第15巻8ページの表4より抜粋

を温存しており、決勝で最大に近いパフォーマンスを発揮していたということがうかがえます。

同種目に出場した日本人選手は、残念ながら決勝進出は叶いませんでした。準決勝における日本人選手のPB達成率は97.1～98.2%であり、ファイナリストの平均程度であったようです。準決勝レースにおけるPB達成率をもう少し高められれば決勝進出も見えてきそうですが、さらに記録を高めてくる世界のファイナリストたちに決勝レースにてどのように挑むかを考えておく必要があるかもしれません。

表3は、同大会の男子4×100mリレーの決勝進出チームを分析したものです。PB達成率は、予選（98.3～101.6%、平均99.9%）、決勝（99.3～100.8%、平均100.2%）ともに非常に高いものでした。PB達成率が100%を上回るとは、チームベスト記録が更新されることを意味します。同大会では、予選では5つのチームが、決勝でも3つのチームが、チームベスト記録を更新しました。予選から非常にレベルの高いレースが展開され、どのチー

ムも力を温存という訳にはいかないようです。

このような分析は他の男女短距離種目においても行われ、報告されています。日本国内の大会（日本選手権やインターハイなど）においても、予選、準決勝、決勝とレースを重ねる点は同じです。皆さんも大会出場の際に各レースにどのように挑んでいくか、この分析結果を参考に考えてみてはいかがでしょうか。

【2019年ドーハ世界陸上ロード種目のパフォーマンスは暑熱環境でどうなっていたか？

～「世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析 — 男女マラソン・競歩種目における国際パフォーマンスの現状とレース分析 —（岡崎、陸上競技研究紀要第15巻31-42ページ）」より～

三浦 康二（日本スポーツ振興センター）

2019年9月から10月にかけてカタール国ドーハにて行われた世界陸上でのロード種目（男女マラソン、男女20kmW、50kmW）は酷暑の炎天下を避けて現地時間

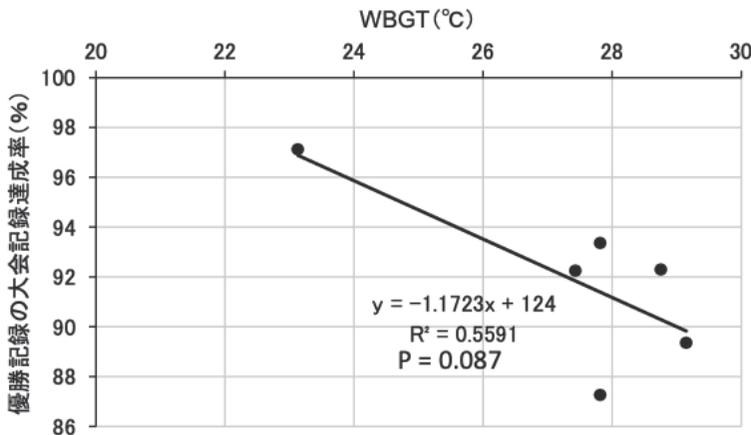


図1 各種目の優勝記録の大会記録達成率とスタート時のWBGTの関係

引用図：陸上競技研究紀要第15巻33ページの図4

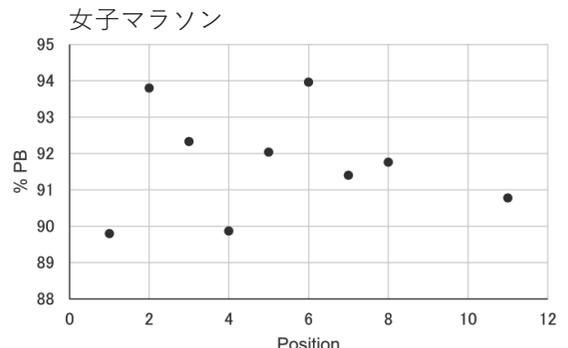
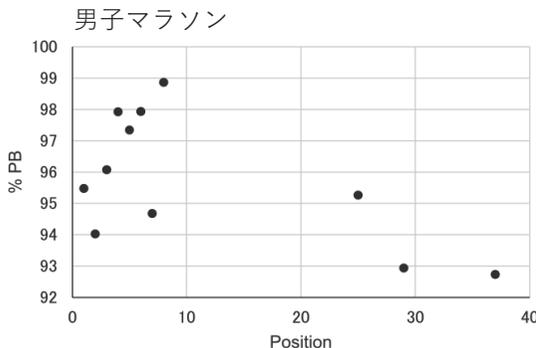


図2 男女マラソンの順位とパーソナルベスト達成率との関係

引用図：陸上競技研究紀要第15巻35ページの図7、36ページの図10より抜粋

の深夜から未明にかけて実施されたのは記憶に新しいところ。また、2021年に延期になりましたが、東京オリンピック陸上競技のロード種目は札幌とはいえ8月上旬に実施されることで、一定の高温多湿の暑熱環境下で実施されることが予想されます。

日本陸連の杉田科学委員長をはじめとする暑熱対策グループは、これらの大会に向けて、ここ数年間、候補選手を含めた競技者のコンディション調査と実際の競技会に出向いて環境調査などを行ってきました。とりわけ、昨年のドーハ世界陸上は、これまで夏季に行われてきたオリンピック、世界陸上にはない湿度との戦いであり、日本で開催されるオリンピックに向けた対策のシミュレーションとしては最適の環境でした。

図1の横軸はWBGTという湿度と気温、輻射熱（光の照り返しなどを反映）した熱中症予防などに用いられる指標で、ドーハ世界陸上のロード各種目のスタート時に計測した値です。一般的には28℃を超えると厳重警戒、31℃を超えると危険でありともに運動を中止すべき条件とされています。また、縦軸は各種目の優勝記録の大会記録に対する比率（達成率）です。厳しい環境下であったことで完走・完歩率が低かったことはすでに多く

報道されていますが、図にみられるように、WBGTが高かった5種目では達成率が低く、優勝者といえども厳しい環境に苦しんだことがわかります。

図2～4は各種目の8位までの選手および日本代表選手の自己記録（パーソナルベスト）に対するレースでの記録の比率（パーソナルベスト達成率）です。

大会終盤に行われた男子マラソンこそスタート時のWBGTが低く、比較的レースに適した環境だったことで下位の選手でも93%前後の達成率でしたが、他の種目では優勝者でもそこに及ばない、90%前後の達成率で、良くても94%以下と、厳しい環境下では持っていた力を発揮することが難しかったことがよくわかります。

ただし、その中でも高いパーソナルベスト達成率だった場合には、そのためのペース配分として、前半に余力を残して、後半に維持もしくはペースアップするようなものだったことが本文中で5kmごとの区間ペースの変化とともに解説されています。日本の夏の高温多湿の環境は、世界的にみても持続的な運動を行うには非常に厳しいとされていますが、このようなペース配分の考え方は、レースだけでなく、日常のトレーニングでも重要ですので、参考として見る価値はあるでしょう。

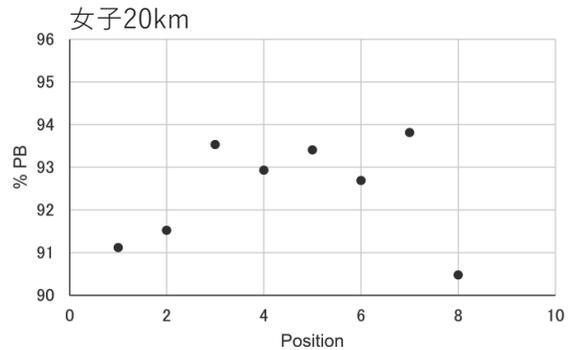
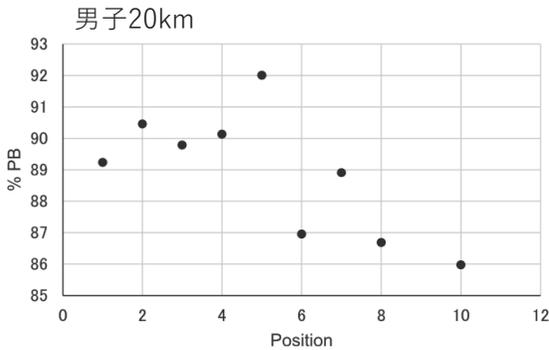


図3 男女20kmWの順位とパーソナルベスト達成率との関係

引用図：陸上競技研究紀要第15巻38ページの図13、39ページの図16より抜粋

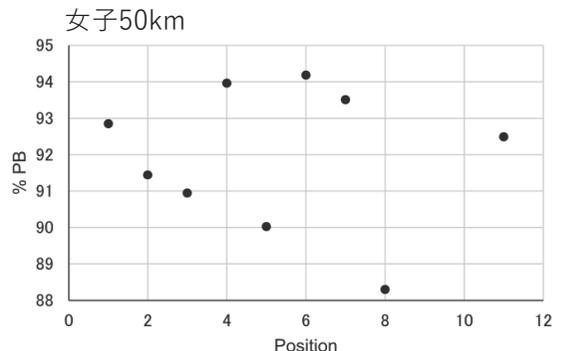
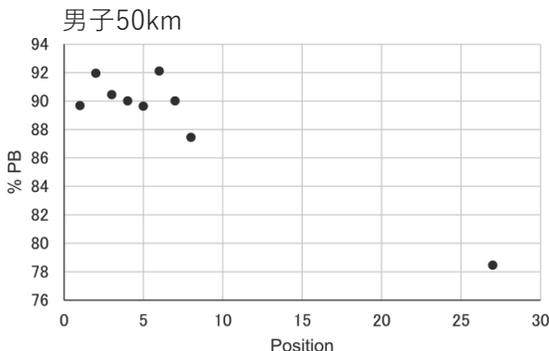


図4 男女50kmWの順位とパーソナルベスト達成率との関係

引用図：陸上競技研究紀要第15巻40ページの図19、42ページの図22より抜粋

リモートでランキングを決定!

「2020 全国高等学校リモート陸上競技選手権大会」/「第66回全日本中学生通信陸上競技大会」

全国の高校生アスリートへの活動モチベーションの維持と将来的にスポーツを充実した生活の一部と捉える心を育むため、新たな競技会の形として「2020全国高等学校リモート陸上競技選手権大会」を開催することが決定いたしました。各都道府県が指定する競技会への参加者全員が本大会に出場したこととし、競技結果からワールドアスレティックスのリザルトスコアを用いた全国のポイントランキングをつけます。

また、例年、各都道府県で全日本中学校陸上競技選手権大会の予選を兼ねて開催されてきた「第66回全日本中学校通信陸上競技大会」（各地で開催された通信陸上の記録を集計し、全国100位まで発表）は、新型コロナウイルスの影響により6月末まで延期・中止を要請しておりました。7月からの競技会再開に伴い、「第66回全日本中学生通信陸上競技大会」として、できるだけ多くの選手が出場できるように競技会の開催期間などを変更し、例年通り、各都道府県大会各種目の記録のランキングをつけるとともに、本年はワールドアスレティックスのリザルトスコアを用いた全国のポイントランキングをつける形で開催いたします。

■ 2020全国高等学校リモート陸上競技選手権大会

- 開催期日：2020年7月1日（水）～9月6日（日）までに実施される各都道府県が事前に指定した競技会。
- 開催会場：各都道府県内の日本陸上競技連盟公認の陸上競技場
- 実施種目：インターハイ実施予定の個人種目（男子19、女子18）

■ 第66回全日本中学生通信陸上競技大会 ～アシックスチャレンジカップ～

- 開催期日：2020年7月2日（水）～10月31日（土）までに各都道府県会場において実施する。開催できない場合、また実施できない種目がある場合は、事前に対象大会・対象種目として指定する。
- 開催会場：各都道府県内の日本陸上競技連盟公認の陸上競技場
- 実施種目：全中実施種目に一部の学年別種目を加えた種目（男子16、女子12）

「2020全国高等学校リモート陸上競技選手権大会」 特設ページはこちら

<http://jaaf.or.jp/remote/highschool>



■ランキングの作成方法

(1)ワールドアスレティックスのポイントランキング制度におけるリザルトスコアを引用し、記録をポイント換算しランキング付けを行います。

※記録のみの順位付けも行う予定です。

※ハードル種目、投てき種目はIAAF Scoring Tablesで設定している規格と異なりますが、該当種目の数値を流用します。

※混成競技、競歩種目はリザルトスコアを使用せず、記録のみを使用します。

(2)集計採用記録は指定競技会でのベストポイントとします。

※ベストポイントとは、各ラウンド・各試技における風の条件によるポイントの修正を行った指定競技会に出した最高のポイントを指す。

(3)その他

- ランキングの集計は、各都道府県から本陸連へ送付された記録データを基に行います。例えば、走幅跳、三段跳でセカンド記録以下の試技の記録と風力が記載されていない場合などは、送付されたデータのみを集計対象とします。
- 欠場、記録なし、失格などにより記録が残らなかった場合は、集計対象となりません。
- 混成競技は風力による影響を考慮せず、総合得点（追風参考も含む）により集計します
- 混成競技の中で出た各種目の記録は、個々の種目の集計対象には含みません。

■ポイントの計算について

ワールドアスレティックスが定めるIAAF Scoring Tablesをもとに算出します。

100m、200m、110mH、100mH、走幅跳、三段跳については、風の影響を考慮して、追い風、向かい風による補正をします。

追い風		向かい風	
+4.0 m/s	-24 pts	-4.0 m/s	+24 pts
+3.0 m/s	-18 pts	-3.0 m/s	+18 pts
		-2.0 m/s	+12 pts
		-1.0 m/s	+6 pts
+0.0~+2.0 m/s	-0 pts	-0.0 m/s	+0 pts

(例) 男子100mの場合

A : 11.00 (-2.0m)

→ 886pts + 12pts = 898pts

B : 10.99 (+1.0m)

→ 889pts = 889pts

となり記録としてはBが上位であるが、ポイントではAが上位になる。

※IAAF Scoring Tablesはこちら

<https://www.worldathletics.org/news/iaaf-news/scoring-tables-2017>



※風速 ±0.1m/s につき ±0.6 ポイントが加減される。

※風速 0m/s ~ +2.0m/s は減点されない。±4.0m/s 以上の場合も適応される。

(例: -0.5m/s = +3 ポイント、+2.1m/s = -12.6 ポイント)

セイコーゴールデングランプリ陸上2020東京 ～国内トップアスリート、そして高校生が国立競技場に集結！～

■大会概要

- 開催日程：2020年8月23日（日）
- 開催会場：国立競技場
（〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 10-1）
- 主催：公益財団法人日本陸上競技連盟
- 特別協賛：セイコーホールディングス株式会社
- 主管：公益財団法人東京陸上競技協会
- 放送：TBS系列全国ネット 午後3時から生中継
- 配信：TVer、TBS FREEにてLIVE配信



- ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、誠に残念ですが一般のお客様の入場は見送りさせていただくことになりました。テレビ放送、インターネット配信等で楽しんでいただけるように取り組んでいきます。
- ※本連盟で策定した「陸上競技活動再開に関するガイダンス」に基づき実施します。
- ※今後、新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、開催準備をしていきます。
- ※感染状況によっては中止となる場合もあります。

■本連盟 横川浩会長コメント

「2020年は世界中が大きな困難に立ち向かう年となりました。新型コロナウイルスの影響により、多くの競技会が中止や延期となり、活動を自粛する日々が続いておりましたが、陸上競技界は、この7月、新たなスタートをしております。

そのような中、文部科学省、スポーツ庁、そして東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のご支援を賜り、国立競技場を会場とするセイコーゴールデングランプリ陸上2020東京の開催の機会を頂きました。

栄えある国立競技場の舞台から、競技会再開を待ちわびたアスリートたちの元気な姿と陸上競技の魅力を存分に届けて参ります。

今大会は新型コロナウイルスの感染予防対策を最優先とし、陸上競技を支えて頂いている方々、陸上競技を応援して頂いている方々と会場で喜びを分かち合うことは叶いませんが、皆様の思いを大切にその日を迎えたいと思います。

日夜奮闘する医療従事者の皆様及び社会生活を支えてくださっている方々、並びに競技会開催にご尽力を頂きました関係各位に、参加するアスリートともども、私ども日本陸上競技連盟は、心より感謝申し上げます。」

■「セイコーゴールデングランプリ陸上2020東京 ドリームレーン」

多くの大会の中止や延期、そして夏の祭典であるインターハイが中止となり、積み重ねてきた練習の成果を発揮する場が失われてしまっている高校生に、国立競技場で日本のトップアスリートに挑戦する「ドリームレーン」と題した夢の舞台を準備いたしました！

■セイコーゴールデングランプリ陸上2020特設東京特設サイト

- ▶ <http://goldengrandprix-japan.com/>



大会観戦ガイド

日本陸上競技連盟主催・後援大会の中止・延期一覧

2020年7月30日現在

大会名	開催日	中止・延期(変更日程)
第7回木南道孝記念陸上競技大会	5月6日	延期
第104回日本陸上競技選手権大会・長距離種目	5月9日	延期(12月4日)
セイコーゴールデングランプリ陸上2020東京	5月10日	延期(8月23日)
第68回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会	5月15日～5月17日	延期(9月18日～9月20日)
第66回全日本中学生通信陸上競技大会～アシックスチャレンジカップ～	5月16日～7月31日	延期(7月1日～10月31日)
Denka Athletics Challenge Cup 2020	6月5日～6月6日	延期
第104回日本陸上競技選手権大会・混成競技 第36回U20日本陸上競技選手権大会・混成競技	6月13日～6月14日	延期(9月26日～9月27日)
第104回日本陸上競技選手権大会	6月25日～6月28日	延期(10月1日～10月3日)
2020全国高等学校リモート陸上競技選手権大会	7月1日～9月6日	新規
“日清食品カップ”都道府県小学生陸上競技交流大会	7月～11月	新規
2020函館マラソン	7月5日	中止
秩父宮賜杯第60回実業団・学生対抗陸上競技大会	7月18日	中止
第73回全国高等学校陸上競技対校選手権大会	8月12日～8月16日	中止
第55回全国高等学校定時制通信制陸上競技大会	8月13日～8月15日	中止
第47回全日本中学校陸上競技選手権大会	8月17日～8月20日	中止
第55回全国高等専門学校体育大会陸上競技	8月22日～8月23日	中止
“日清食品カップ”第36回全国小学生陸上競技交流大会	9月20日	中止
第41回全日本マスターズ陸上競技選手権大会	10月2日～10月4日	延期
第75回国民体育大会	10月9日～10月13日	延期
第59回全日本50km競歩高畠大会	10月25日	中止
第36回東日本女子駅伝	11月8日	中止
第10回神戸マラソン	11月15日	中止
第10回大阪マラソン	11月29日	中止
第75回香川丸亀国際ハーフマラソン	2月7日	延期(2022年2月6日)

事務局からのお知らせ

◆◆ホクレン・ディスタンスチャレンジ2020 ライブ配信アーカイブ公開中◆◆

中長距離の育成・強化を目指して北海道を転戦する「ホクレン・ディスタンスチャレンジ2020」を7月4日(土)士別大会・7月8日(水)深川大会・7月15日(水)網走大会・7月18日(土)千歳大会の4大会に渡って開催いたしました。陸上競技では新型コロナウイルス感染症の影響で6月までの競技会が中止・延期となっていました。今大会は陸上競技活動再開の第一歩として、感染防止対策を講じた上で、当初の予定通りの日程で行いました。

ほとんどの選手にとってこれが今年最初のレースだったにもかかわらず、選手たちが蓄えてきたエネルギーが一気にあふれたかのように、好記録、好レースが相次ぎました。

各大会のライブ配信のアーカイブ映像を公開しております。実況解説付きでお送りしておりますので是非ご覧ください。



ライブ配信アーカイブはこちらから！

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1531/>



◆◆日本陸連オフィシャルショップ◆◆



大人気コラボグッズ「JAAF × ハローキティ」「JAAF × リラックマ」、JAAFオリジナルグッズ 好評発売中!!

<https://jaafshop.official.ec/>



◆◆メールマガジン配信中!◆◆

日本陸連公式メールマガジンを好評配信中です。

登録はこちら <https://www.jaaf.or.jp/mailmagazine/>



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩 (陸連会長)
友永 義治 (陸連副会長)
八木 雅夫 (陸連副会長)
尾縣 貢 (陸連専務理事)
麻場 一徳 (陸連強化委員長)
風間 明 (陸連事務局長)
牧野 豊 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
石田 夢

陸連時報編集室

〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-2
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9階
日本陸上競技連盟内
TEL : 050-1746-8410
FAX : 050-3588-1869